

ニッポン全国元気団紹介 山口県連盟 山口第3団

歴史と自然、異文化に触れる多彩な活動

かつては西の京と呼ばれ、室町時代に大内氏の治世で栄華を誇った県中心部の県庁所在地、山口市。国宝瑠璃光寺五重塔やザビエル記念聖堂、幕末の藩士宿所だった十朋亭など、歴史を偲ばせる建物や旧跡が多く、湯田温泉や蛍舞う一の坂川、日本三大火祭りの七夕ちょうちん祭りなどで、県内外から多くの観光客を集める。市中心部の山口情報芸術センター、新幹線停車駅の新山口駅隣に昨年7月に完成した県内最大のKDDI維新ホールなど、現在はアート発信拠点としての顔を持つ。

山口第3団はここを拠点に、四方を山に囲まれた良好な環境のもと自然や歴史に触れる活動をしている。

■北は島根県、南は瀬戸内海の広大なエリア

山口第3団は、元々は山口市内にあった平川、湯田、白石の3つの団が1つにまとまる形で1961年に設立。60年以上の長い歴史を誇る。平成の大合併の時に、山口市は周囲の町と合併。北は島根県に接し、南は瀬戸内海に面する広大な市域となったが、山口第3団は広範な山口市はもちろん、これまでの実績やスカウトの要望を踏まえ、県内の各地で活動を展開している。



他の多くの団が団員数を減らしているのに対し、年によって増減はあるものの、確実に団員を増やしている。特にカブ隊とビーバー隊が少しずつ増えていて、カブからボーイへ上進するスカウトが多い。増加の背景には、地道な広報とスカウトの立場に立った活動の工夫にありそうだ。

■「知ってもらう」ための地道な取り組み

これまで接点を持たなかった人に「ボーイスカウト」を知ってもらう手段として、山口第3団はホームページと紙媒体の市広報を活用している。ホームページはキャンプファイヤーやカヌー、野外炊事などこれまでの活動で撮影した写真を大きく載せ、「参加してみたい」「やってみみたい」と思ってもらえるよう視覚に訴える。団のプロフィールや募集内容を簡潔にまとめて文字数を抑えた。冗長にならないようなレイアウトで、シンプルでわかりやすい。



実際に、ホームページからの問い合わせは増えていて、2020年からの新型コロナウイルス感染拡大の影響で学校行事や外出、大人数で集まるイベントが制限されるなか、屋外でのびのびと体を動かすこと、仲間と一緒に楽しむこと、自分で何かができるようになる体験への潜在的な欲求は、人々のスカウト活動への関心につながり、入団者の増加に至っていると思われる。

市広報には毎年5月にスカウトの募集広告を掲載。ホームページと異なり、「ボーイスカウト」に関心がなかった不特定多数の人の目にも留まる市の配布物は、未だに有力なPR手段だ。

■スカウトの目線で活動計画

ボーイ隊以上は技能を高めること、カブ、ビーバー隊では、親しい人間関係を築いたうえでいろいろな体験をさせることを目指している。一貫しているのは、スカウトが次も参加したいと思ってくれるように活動内容を工夫していることだ。キャンプ、カヌー、ラフティング、高原サイクリング、スキー訓練など、季節ごとに楽しめる活動を計画。ペルセウス座流星群の観察、ジャガイモや玉ねぎの種付けと収穫など自然とふれあう体験や、市内の国宝「瑠璃光寺 五重の塔」庭園内のキャンドル設置など多彩なメニューは、自然と歴史が共存する山口市ならではの取り組みだと言える。



毎年9月に全国で一斉に行われるゴミ拾い、12月の街頭でのユニセフ募金呼びかけなどのボランティア活動を通し、思いやりの心を育む。合言葉は「なろう。一人前に！」。

子ども達が楽しんでいる姿、保護者も参加して一緒に楽しむ体験は口コミとして広がり、スカウトの増員につながっている。

現在はコロナ禍の下で短時間の活動が多い。今後の活動を発展させ、にぎやかな団にするためにも団員や保護者にアンケートを取り、参加者が充実感を得られるような企画を考えていくそう

■地元で国際交流、多文化共生

山口市は国立の山口大学を抱え留学生も多い。ボーイスカウト活動は世界中で実施されていることから、山口第3団は日頃から山口大学留学生と国際交流を図っている。これまでにアフリカのマラウイ、コンゴ民主共和国、バングラデシュなどの学生と一緒に野外炊事を楽しみ、自然体験活動やゴミ拾い活動に参加してきた。留学生には自国紹介のプレゼンテーションを依頼し、スカウトが直に世界のことに触れ、関心を持てる機会を作っている。これからますます多文化共生が求められる中、山口第3団は国際交流の機会を積極的に取り入れ、グローバルな視点を持ったスカウトの育成に力を入れていく。

